



# 中国の水稲に対する 環境に優しい施肥 技術の導入

2009年11月23日から12月11日までの3週間、中華人民共和国の北京市にある中国農業科学院を拠点に、戈壁砂漠の南に位置する寧夏回族自治区（回族の名前から分かるようにイスラム教徒が多い）の区都の銀川市と洞庭湖の近くにある湖南省長沙市、岳陽市にJICA（日本国際協力機構）の持続的農業技術研究開発計画（第2期の初年目で「環境に優しい農業技術開発及び普及」がプロジェクトの目的）の土壤肥料分野（環境保全型施肥技術）の短期専門家として派遣されました。



写真1／寧夏回族自治区銀川市靈武の現地試験圃場  
（枠試験で肥料の溶脱や利用率を調べています）

北京市では土壤モニタリング研修会で水稲に対する「施肥改善技術」、寧夏回族自治区銀川市と湖南省長沙市では「多収・良食味のための施肥技術」と「倒さないで多収を得るための生育診断と制御法」を、本プロジェクトの主要なテーマの一つである環境保全型施肥管理技術に焦点を当てて、育苗箱全量施肥、側条施肥、肥効調節型肥料などを紹介しました。寧夏と湖南では水稲に対して肥効調節型肥料を初めとする緩効性肥料の試験も行われていて、ある程度の効果はあるものの、肥料代が高価なこともあって水稲に対しては普及していないのが現状でした。むしろ、「測土配方施肥」と称して、土壤診断に基づく施肥の処方箋があり、こちらの方が普及しているようです。なお、研修会では聴衆が活気に満ちており、多くの質問が出されました。さらに、土壤肥料の長期専門家と一緒に中国農業科学院の土壤研究者と、研究進行状況や今後の計画について論議しました。次に、寧夏と湖南の農牧庁あるいは農業庁と農業科学院のプロジェクト参加研究員と会議室や現地試験圃場で、進捗状況等について意見交換を行いました。また、中国

東北飼料イネ研究チーム

**土屋一成**

TSUCHIYA, Kazunari



側研究者との論議では研究状況を聞き、日本の施肥の現状を伝えることができました。さらに、肥効調節型肥料の溶出を予測するため、現地試験地の地温や気温のデータの提供を要請しました。中国では人口が世界一多いことから分かるように、人手はあるので、省力と言うよりも低コストで黄河や洞庭湖の水質汚染を軽減する施肥技術を求めているとのことでした。2010年には、寧夏と湖南の農業科学院に側条施肥田植機を導入し、肥効調節型肥料を主体とした基肥だけで水稲を栽培する予定になっています。



写真2／湖南省長沙市の稲刈り後の風景  
（人手があるため手植えが多い）

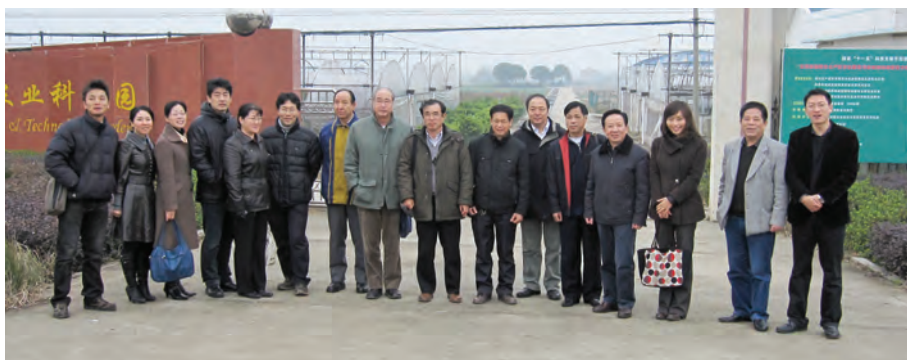


写真3／湖南省岳陽市農業科学試験場の皆さんと（左から9人目が筆者）